様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２４６

研究課題名（和文）真言密教寺院の所蔵文献と近世前中期の説話文学に関する研究―地蔵寺を中心として

研究課題名（英文）A Study of Documents Owned by Esoteric Buddhist Temples and Narrative Literature in the Early and Middle Edo Period Focusing on Jizoji-Temple

研究代表者
山崎　淳（YAMAZAKI, JUN）

日本大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：２０４６７５１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：大阪府河内長野市の地蔵寺が所蔵する文献の調査を行い、そこで得られたデータをもとに、地蔵寺開山である蓮体（1663～1726）の著作を分析した。その結果、近世における仏教説話集の形成や説話集編纂者の知識体系・志向・行跡を考察する上で、寺院所蔵文献の調査がきわめて有効であることを指摘した。また、寺院に所蔵される近世の版本が、諸本研究や出版研究のために注目すべき資料であることを提示することができた。

研究成果の概要（英文）：I surveyed the documents owned by Jizoji-temple(Kawachinagano,Osaka),and on the basis of the data,analyzed the works of Buddhist priest Rentai(1663-1726) who founded this temple. As a result,I pointed out that investigation of the documents owned by Buddhist temples is very useful for considering how anthologies of Buddhist narratives were compiled in the Edo period and what those editors' knowledge,tastes,and lives were.In addition,I was able to show that printed books in the Edo period owned by Buddhist temples are remarkable materials for studies of various texts and publication.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：寺院所蔵文献　近世　説話　真言密教　仏教文学

１．研究開始当初の背景

(1)これまでの研究との関連：報告者は、本研究の開始前、神戸説話研究会（代表・池上洵一）において、真言僧・蓮体（1663～1726）編の説話集『観音冥応集』の輪読・翻刻・出版に参加した。その中で、蓮体が晩年を過ごした地蔵寺の存在を視野に入れる必要を感じ、平成 20～22 年度科学研究費補助金　基盤研究（C)「近世仏教説話集と寺院所蔵文献に関する研究―蓮体の著作と河内地蔵寺を中心に―」(課題番号:20520163）において同寺所蔵文献の悉皆調査に着手した。その調査は、地蔵寺所蔵文献に対する初めての本格的な書誌調査であった（調査自体は過去に３度ほど行われている）。この過程で、同寺の調査をさらに継続的に進める必要が生じてきた。近世前期から中期にかけての寺院における学問体系や文化的営為（説話集編纂を含む）を俯瞰するのに、同寺が格好のサンプルであること、また同寺所蔵文献が内容や量において、当初の予想を大きく上回るものであることが判明したからである。調査の継続により、説話文学・仏教文学と寺院所蔵文献との関わりを研究する上で、さらなる知見がもたらされることが予想された。

(2)寺院調査との関連：近年盛んになってきた文学研究における寺院の文献調査は、中世文学研究からのアプローチが中心である。そのため、所蔵されるすべての文献を対象とする悉皆調査は、主に古代・中世創建の大寺院において行われることが多い。2010 年度の中世文学会春季大会のシンポジウムが、寺院聖教調査をテーマにしていたのは象徴的だったといえる。それらの調査によって文学・歴史分野の研究が大きく進展したことは確かであるが、一方で元禄四年（1691）建立の地蔵寺のような小規模寺院が調査対象となりにくいのも、その傾向と無縁ではなかった。しかしながら、寺院には、近世に成立したもの、出版されたものも多く残存し、種類・量においては、古代・中世のものをはるかに凌駕する。古代・中世と同様、知識集積の場として、近世における寺院の存在を無視することはできない。近世前・中期に活躍した蓮体という個性によって収集・利用され、かつ一定の分量を有する地蔵寺所蔵文献には、寺院調査における新たな可能性が期待できた。

(3)近世文学研究との関連：近世文学研究においては、図書館の蔵書や大名家の旧文庫が、調査・研究の対象となることが多い。数量や歴史的背景を考えれば、それは妥当ではある。しかしながら、(2)でも記したように、寺院には近世の資料が数多く蔵されている。また、近世成立の文学作品には、僧侶によって作成されたものも存在する。近時、全集（仮名草子編・仏書編）が刊行されている浅井了意などはその代表例である。したがって、説話文学のみならず、それに近接したジャンルである仮名草子や噺本などとの関連においても、寺院の所蔵文献は重要な位置を占めるのではないかと考えられた。文学形成の場として、改めて近世の資料を豊富に所蔵する寺院に注目した所以である。

２．研究の目的

(1)地蔵寺所蔵文献の全体像の把握：悉皆調査である以上、全体像の把握が一つの大きな目的となることは言うまでもない。それは同時に、文学作品成立の背景にある作者の知識体系の解明と結びついてくる。蓮体の所持本が核となっている地蔵寺所蔵文献は、蓮体の著作を考える上での基本データとなる。また、同寺所蔵文献には、蓮体より後の歴代住職が収集した一群も存在する。これらの調査・分析も視野に入れることで、逆に同寺における蓮体の著作・所持本のより明確な位置付けも可能になる。

(2)蓮体の活動実態の解明：蓮体の著作は、庶民教化と深く関わっており、彼の行動を明らかにすることも重要である。地蔵寺所蔵文献では、巻末識語のみならず、傍注・欄外注などの書き入れにも蓮体の活動を具体的に記すものがある。また、経典講義を記録した自筆の覚書もいくつか見出している。蓮体の年譜はこれまでも何度か提示されているが、地蔵寺所蔵文献を精査することで、より詳細な蓮体の年譜が作成可能となる。

(3)蓮体における説話受容の具体相の解明：蓮体の活動で大きな比重を占めるのが、説話集編纂と経典講義である。前者はもちろんだが、後者でも説話は重要な役割を果たしている。蓮体がどのようなものから、いかに説話を受容し活用していたのか、類話との比較のみならず、地蔵寺所蔵文献の書き入れなども手がかりに、事例の収集・分析を進める。これは、(1)(2)との関係からも、解明していくべきテーマである。

３．研究の方法

(1)地蔵寺所蔵文献の悉皆調査：調査の中心となる地蔵寺には、文献を収めた箱が約五十存在することを確認している。同寺には昭和四十年代に作成された目録カードがあるが、作成から約四十年が経過しており、その内容も基本的に所蔵番号と書名からなる簡単なものである。また、その目録に載せられていない文献も存在することが判明した。そこで、当該目録カードと現存典籍との照合、現存典籍全体の詳細な書誌調査を進めた。同時に重要典籍の撮影を行った。作業に際しては、研究協力者として中山一麿（大阪大学文学研究科招聘研究員)、中川真弓（日本学術振興会特別研究員）の助力を仰いだ。

(2)地蔵寺以外の蓮体関連寺院の文献調査：

所蔵文献に名前の見えた寺院、あるいは蓮体や浄厳（蓮体の師）と関係のあった寺院の文献も平行して調査した。主に対象としたのは、報告者が連携研究員として参加している金剛寺（大阪府河内長野市）、本研究課題の研究協力者である中川真弓が中心となって調査を進めている宝泉寺（岡山県倉敷市）である。これらの寺院は、現在目録の整備が進められつつあるので、そうした成果も利用しつつ、調査を行った。

(3)図書館・研究機関等での文献資料収集：関係論考の収集とともに、関係する文献資料の調査を行った。可能な場合は、デジタル・マイクロ写真の複写を入手した。近世の仏教説話集のみならず、蓮体が活用することの多い中国の『高僧伝』なども、和刻本の複写を入手することに努めた。

(4)データ入力：書誌を記入した調書の情報をパソコンに入力し、データベース化を行った。これは前研究課題からの継続であり、新規の調査情報を加えていくとともに、目録としての体裁の整備も進めた。

(5)成果の外部への公表：以上の調査・作業を踏まえ、地蔵寺所蔵文献を中心に重要と認められる作品の個別的精読・分析を行い、その成果を学会・学術雑誌等に発表した。

４．研究成果

(1)仏教文学研究における近世文献の重要性：地蔵寺を中心とする文献資料調査のデータを通して、寺院所蔵の近世資料が仏教文学研究を進展させる可能性を持つことを提示した。具体的には、以下の４点を挙げることができる。

①経典講義の記録が、説話集形成について重要な情報をもたらす事例が見出せる点：地蔵寺には、経典講義について記した蓮体自筆の記録が、講義聞書、折紙の覚書、所持本巻末の覚書など様々な形で残されている。たとえば、講義聞書『大疏対授記』には、元禄十四年（1701）に蓮体が行った『地蔵菩薩本願経』講義に関する記録がある。そこに記された情報（時間・場所など）は、後の『観音冥応集』（蓮体編・宝永二、三年［1705、1706］刊）巻第五 26 話の内容と密接に関係することが判明した。すなわち、これらの記録は、蓮体編の説話集に記述された彼の行跡を裏付けるとともに、収録説話の入手経路や入手時期に関する有益な情報を提供する資料なのである。

②所持本の書き入れが新たな著作へつながっている事例が見出せる点：たとえば、地蔵寺蔵『三宝感応要略録』（慶安三年［1650］版）の書き入れ（蓮体自筆）が、『要略録』の本文を合わせた形で、『観音冥応集』の本文へ発展しているというケースがある。所持本にインプットされた知識が、著作へアウトプットされたわけである。このように地蔵寺所蔵文献の調査データからは、僧侶の学問的背景と文学作品形成との間に強い関係を見出すことができる。これは本研究課題の大きな成果の一つである。なお、この点を別の作品でより具体的に推し進めたのが、後述の(4)である。

③書肆と僧侶・寺院との関係を明瞭に示す事例を見出せる点：所蔵文献の一つに『費財録』という蓮体自筆の出納帳的なものがある。この資料からは、蓮体と様々な人や寺院との交流がうかがえる。その中に、蓮体のいくつかの著作の版元になっている毛利田庄太郎（西鶴作品の版元としても知られている）や小嶋勘衛門への支払い（書物代など）の記事が見える。蓮体は、書物の執筆者かつ購買者であったわけである。これは、近世前・中期における書肆と僧侶・寺院との関係を示す貴重な物的証拠である。版本を所蔵文献の核とする近世寺院ならではの事例と言える。

④仏教文学における版本の意義を確認できる点：版本は、近世よりも前に成立した作品の場合、本文批判という点から見て評価が必ずしも芳しくない。しかしながら、それとは別の視点から捉えることも可能である。貞享二年（1685）版『沙石集』や元禄六年（1693）版『宝物集』では、目録に各説話の丁付が印刷されている（両作品とも地蔵寺所蔵文献にあり）。すべての版本に共通するものではないが、蓮体の場合、経典講義（唱導活動）に説話を多用していたので、このような形態が非常に便利であったことは想像に難くない。地蔵寺蔵『地蔵菩薩霊験記』の目録に蓮体が丁付を書き入れていることは、その推定を支持するものである。このように、寺院所蔵文献を通して、機能的な面から版本の利点を浮かび上がらせることもできるのである。

(2)蓮体の伝記資料としての『和漢合運』：地蔵寺所蔵文献の中でも、本研究課題において特に注目したのが、円智編・吉田光由補『指掌和漢皇統編年合運図（和漢合運）』という年代記である。『和漢合運』には多くの版があり、相当の需要があったと推測される。地蔵寺蔵本は正保二年（1645）版である。蓮体が本書を入手した時期は、これまでにわかっている彼の行跡や地蔵寺蔵『元亨釈書』の識語（蓮体より前の所持者のもの）との照合から、天和三年～貞享四年（1683～1687）頃と推定できる。この時期は蓮体の二十代前半に当たり、したがって、本書は長きにわたり彼の座右にあったものと考えることができる。蓮体の書き入れも多く、とりわけ末尾５丁は手書きの年表になっている（１丁目は前所持者、２丁目以降は蓮体による）。その部分はいわば「自分史」としての性格が表れており、蓮体の伝記資料として大いに期待ができるものである。事実、当該『和漢合運』からは、これまでには知られていなかった蓮体の行跡を見出すことができた。たとえば、蓮体が

寛文三年（1663）六月十一日生まれであることや、延宝八年（1680）に高松藩初代藩主松平重頼から資縁金（仏道修行の助けと成る資金）を賜った記事がそれに該当する。前者により従来は年のみが知られていた蓮体の生年月日が、後者により重頼と蓮体の初期の邂逅が判明した。本書は、まさに第一級の伝記資料として位置付けることができる。そして、本書の存在によって、改めて地蔵寺所蔵文献の意義が明らかになった。

(3)『和漢合運』から見える蓮体の志向：(2)においては、『和漢合運』末尾の自筆年表部分に注目したが、印刷部分への書き入れも、蓮体の学問や意識を探る上で重要である。これらを検討した結果、次のような蓮体の志向を浮かび上がらせることができた。
①地元河内への意識：『和漢合運』の書き入れの中に、「河内ノ国長野ノ陵」に対する朱引（人名・地名などを示すために語句の左右や中心に施された朱線）がある。実はこの前後は、『和漢合運』の中でもほとんど書き入れがない部分である。それだけにこの朱引には、蓮体の志向が表れていると見てよい。当該陵に葬られたのは仲哀天皇であり、歴代で初めて河内に葬られた天皇である。すなわちこの朱引には、地元・河内を積極的に歴史に位置付けようとする蓮体の強い意識を読み取ることができる。この他にも、源義家など河内に深い縁を持つ源氏に関する記事を補足・訂正している事例が散見される。ここには、極めて色濃い在地性を認めることができる。近世仏教説話集に在地性が強く表れることは従来指摘されていた。本資料によって、そうした性格は、説話集成立のバックボーンたる編者の所持本に、すでに内在していたことを指摘できる。
②「九華山」のルーツに対する意識：地蔵寺の山号は「九華山」である。これは中国における地蔵菩薩の聖地「九華山」（現安徽省池州市青陽県）に基づく。蓮体は、同山とそれに深く関わる「金地蔵」なる僧侶（八世紀の人物。『宋高僧伝』によれば「姓金氏。新羅国王之支属」）に関する情報を、『和漢合運』に書き入れている。この書き入れにより、地蔵寺蔵『和漢合運』は便利な歴史年表というのみならず、地蔵寺及び蓮体を歴史的な過去へ連結させる側面を持つことになる。
③過去の僧侶に対する認識：蓮体は所々で過去の僧侶に対して書き入れを行っている。注目されるのは、明恵・無住・親鸞の三人である。明恵に対しては誕生の記事を追加し、入寂の記事の訂正を行っている。無住の記事はもともと『和漢合運』にはなかったが、誕生の記事を書き入れている。蓮体は、『観音冥応集』において、『明恵上人伝記』を高く評価し、無住の『沙石集』を何度も利用している。したがって、これらの書き入れには、真言宗の偉人・明恵や説話集編者の先達・無住に対する崇敬の念を認めることができる。一方、親鸞に関しては、死亡記事を書き入れている。親鸞も無住と同じく『和漢合運』にもともと記事がない。そこに書き入れている以上、関心があったことは認められる。ところが、蓮体は僧侶の死亡記事を書き入れる場合、おおむね「寂」の字を用いるのに対し、親鸞に限っては「死」の字になっている。これは意識的な差別化と言える。『観音冥応集』に見える一向宗（真宗）への否定的な記述からすると、真宗開祖・親鸞へのネガティヴな感情の表れと見ることが可能である。①③は、書き入れに見える僧侶の志向が、その著作と連動している好例と言える。
④詩人・文人への興味：『和漢合運』には、仏教に関わる事項だけではなく、中国の詩人・文人に対する書き入れも散見する。具体的には、六朝から北宋にかけての陶淵明・李白・杜甫・白居易・韓愈・蘇軾・黄山谷に対してである。当時の僧侶としては、貴顕との交流などのためにも、漢詩・漢文は嗜むべきものだったと言える。事実、蓮体も本多忠統（1691～1757。当時は河内の西代藩主）らと漢詩を詠じている。しかしながら、細かく生没の記事を書き加え、時には元の記事を訂正するといった態度からは、③と同様に個々人への強い関心がうかがえる。こうした事例は簡単に一般化してしまうのではなく、僧侶一人一人のケースを確実に掘り起こしていく作業が必要である。本研究はその試みの一つでもある。
　このように地蔵寺蔵『和漢合運』は、蓮体の志向をうかがうのに格好の資料である。そして、所持者が版本をカスタマイズした顕著な例としての位置付けも可能である。

(4) 蓮体編『礦石集』と地蔵寺所蔵文献の関係：蓮体の信仰・活動に大きな位置を占めるのが地蔵菩薩である。そこで地蔵菩薩関連の資料を軸として地蔵寺所蔵文献を分析すると、『礦石集』との関わりがクローズアップされてきた。自筆覚書や『礦石集』の自序から、蓮体は『礦石集』を地蔵説話の集成として位置付けていたことがわかる。ところが、当の地蔵説話の数は全体から見て非常に少ない。その点を、収録説話を改めて分析することと、地蔵寺所蔵文献の地蔵菩薩関連資料を介在させることによって検討してみた。その結果、非地蔵説話であっても、地蔵経典と関連付けられている事例が見出せること、あるいは地蔵寺蔵の地蔵経典注釈書の中に、本来地蔵とは関連しない説話や文言が蓮体によって書き入れられており、『礦石集』にはそういうものが利用されていることが判明した。それらの地蔵経典注釈書は、経典講義に活用されていたことも判明している。したがって、上記の説話や文言は、説話集の前段階に当たる地蔵経典の講義の場をくぐり抜けてきたものということになる。ここに非地蔵説話が『礦石集』内に存在できる一つの理由を見出すことができる。

なお、この内容は、後述の学会発表①において公表したものであり、2014 年度に論文化される予定である。

(5)寺院間のつながり：蓮体は師・浄厳の随伴や自らの経典講義のために、たびたび四国・中国地方に赴いており、その際に善通寺（讃岐）や法輪寺（備前）といった様々な寺院を訪れている。二十代前半からは世尊院（讃岐）・普賢院（備中）などの住職も務めている。また、地蔵寺のある河内長野には、延命寺・観心寺など、他にも多くの真言寺院が存在する。それらの寺院との関係を示す資料を地蔵寺所蔵文献の中にはしばしば見出すことができる。

この点で特筆すべきは、河内の金剛寺所蔵文献との関係である。蓮体著『浄厳大和尚行状記』上巻・貞享元年（1684）八月二十六日条には、浄厳が金剛寺僧徒の要請により延命寺で「秘密経軌」を伝授したという記事がある。これを裏付ける資料を金剛寺において見出すことができた。そこには伝授を行った日付や参加者の名が記されており、さらに金剛寺科研（後述）の報告書で随時公表されている聖教目録と照合すると、ほぼ全員の存在を確認することができた。浄厳の資料というのみならず、近世前・中期の金剛寺を知る資料としても評価できるものである。

この他、浄厳や蓮体が摂津の天満宝珠院で経典講義をしたことを記す資料も、地蔵寺所蔵文献には存在する。このような近世における真言寺院間の関係が確認できる材料を見出せたことは、今後の研究の発展にもつながる成果である。

なお、上記の金剛寺に関する内容については、「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究―聖教の形成と伝播把握を基軸として」（平成 23 年度 科学研究費補助金 基盤研究（B）23320054）の平成 23 年度研究会（平成 24 年２月 27 日　於京都国立博物館）において「地蔵寺所蔵文献調査中間報告―他寺院との関連も含めて―」と題した報告を行った。詳細は今後改めて論文化する予定である。

(6) 版本・出版と寺院所蔵文献：寺院に近世成立の資料が多いことは、「研究開始当初の背景」でも記したところだが、近世という「時代」において、版本の存在と出版という営為は看過できないものである。その点を踏まえ、地蔵寺所蔵文献の一つ『本朝孝子伝』（藤井懶斎編・貞享三年版）を取り上げた。同作品は貞享二年の初版刊行以来、数度にわたり出版されたものである。地蔵寺蔵本を精査し、貞享二年版、他の貞享三年版諸本、及び『仮名本朝孝子伝』（貞享四年刊）と比較した結果、以下の５点を指摘することができた。

①地蔵寺蔵本が、先行する貞享二年版と貞享三年版の中間的な本文を持つこと。
②したがって貞享三年版諸本の中では早い時期に出版されたものであること。
③地蔵寺蔵本以外の貞享三年版諸本の先後関係にも指標を与えること。
④地蔵寺蔵本から他の貞享三年版に至るまでの本文修訂の経緯がたどれること。
⑤修訂には、作者藤井懶斎自身の関与が想定できること。

なお、現時点では地蔵寺蔵本が蓮体所持本だったかどうかについては留保している。ただし、蓮体が経典講義において『本朝孝子伝』を使ったことは、自筆覚書によって判明している。また、当該資料に書き入れが存在する点は、何らかの形での活用があったことを物語っている。したがって、儒者の手に成る本作品が、仏教側でも受容されていたことが明らかになる点においても、本資料及び地蔵寺所蔵文献の意義が認められる。

以上のごとく、地蔵寺所蔵文献は、版本及び出版に関する研究に有益な資料と位置付けることができる。同時に、このような一点一点の細かい調査と分析は、「研究の目的」(1)で記した寺院所蔵文献の全体像を精確に把握するためにも必要な作業である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>山崎淳</u>、地蔵寺蔵『本朝孝子伝』の本文、上方文藝研究、査読有、10 号、2013、pp.17－31
②<u>山崎淳</u>、寺院に所蔵される近世の文献―地蔵寺と蓮体の場合―、仏教文学、査読有、36・37 号、2012、pp.73～82
③<u>山崎淳</u>、地蔵寺蔵『和漢合運』の書き入れから見た蓮体の志向－当該本の性格とともに―、人間科学研究（日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要）、査読有、9 号、2011、pp.288－302
④<u>山崎淳</u>、地蔵寺蔵『和漢合運』蓮体自筆部分―翻刻と解題―、上方文藝研究、査読有、8 号、2011、pp.83－107

〔学会発表〕（計２件）

①<u>山崎淳</u>、蓮体の活動と地蔵寺所蔵文献―地蔵菩薩関連資料を中心として―、仏教文学会、2013 年 9 月 29 日、専修大学神田校舎
②<u>山崎淳</u>、寺院に所蔵される近世の文献―地蔵寺と蓮体の場合―、仏教文学会、2011 年 5 月 29 日、東洋大学白山校舎

６．研究組織

(1)研究代表者

山崎　淳（YAMAZAKI　JUN）
日本大学・生物資源科学部・准教授
研究者番号：２０４６７５１７